

論文内容要旨

論文題名 : Comparison of the endocytoscopic and clinicopathologic features of colorectal neoplasms

掲載雑誌名 : Endoscopy International Open, 04, E397-E402, 2016.

内科系内科学 (消化器内科学分野) 専攻 武田 健一

内容要旨 : 【背景と目的】 大腸腫瘍性病変の治療にあたり、リンパ節や多臓器転移のリスクを予測することは重要である。腫瘍の静脈侵襲ならびにリンパ管侵襲は、リンパ節転移における重要なリスク因子であり、通常病理所見から診断がなされる。Endocytoscopy (EC) は超拡大観察により生体内で生きた細胞も観察可能な内視鏡であり、ECに narrow band imaging (NBI) system を併用 (EC-NBI) することで、血流や微細な腫瘍血管の評価が可能である。そこで、今回我々は大腸腫瘍血管の EC-NBI 所見と脈管侵襲における特徴について比較検討を行った。【方法】 治療前に EC-NBI 観察がなされた 188 の大腸腫瘍性病変に対し後ろ向きの検討を行い、EC-NBI 画像上で腫瘍血管径を測定した。検討にあたり、4 本の腫瘍血管径の平均を「腫瘍血管径」、単一血管における最大径と最小径の変化率を「腫瘍血管径変化率」と定義し、これらの因子と免疫染色により評価した静脈侵襲ならびにリンパ管侵襲との関連性について検討を行った。また、深達度が及ぼす腫瘍血管径の変化が考えられるため、腫瘍血管径ならびに腫瘍血管径変化率と壁深達度の関連性についても検討を行った。【結果】 本検討で評価した 188 病変の内訳は、腺腫 39 病変、tumors in situ 64 病変、T1 腫瘍 56 病変、T2 腫瘍 14 病変、T3 腫瘍 15 病変であった。tumors in situ と T1-T3 腫瘍では、腫瘍血管径と腫瘍血管径変化率ともに T1-T3 腫瘍で有意に大きかった。また、腫瘍血管径ならびに腫瘍血管径変化率は、深達度が深くなるにつれて大きくなる傾向が認められた。T1-T3 腫瘍では、静脈侵襲あるいはリンパ管侵襲陽性腫瘍では、陰性腫瘍に比べて腫瘍血管径と腫瘍血管径変化率が大きくなる傾向がみられた。深達度の影響が腫瘍血管に影響する可能性がもたれたことから、深達度別に検討を行ったところ、T1 腫瘍では、静脈侵襲陽性腫瘍において腫瘍血管径と腫瘍血管径変化率ともに、大きくなる傾向がみられた。T2, T3 腫瘍では、静脈侵襲陽性腫瘍では血管径変化率が有意に大きくなる傾向がみられた。また、T3 腫瘍ではリンパ管侵襲陽性腫瘍で血管径変化率が大きくなる傾向がみられた。

【結論】大腸腫瘍における微細血管構造において、腫瘍血管径と腫瘍血管径変化率は腫瘍深達度と静脈侵襲に関連性がみられ、特に T1 腫瘍ではその傾向が強くみられた。